

## 「子ども文化」と人間関係の相互媒介性

岩田 遵子  
(県立新潟女子短期大学)

### I はじめに

遊びの中で、子ども同士のイメージが対立したり、余り仲の良くないためにある特定の子どもの発言が常に見無視される、などのいざこざは日常的によく起こることである。このような場面を保育では、主に子どものパーソナリティ要因に還元して考えることが多い。

「あの子はわがままだから」とか「あの子はボスのな性格だから」というような解釈はその例である。

しかし、このような「心理主義的」解釈には限界がある。なぜなら、遊びにおけるいざこざは、道具(モノ)の使い方や場所の取り方、テーマの共有の仕方というような文化的営みに関連しているにもかかわらず、その解釈には文化的視点が含まれていないからである。遊びにおけるいざこざは、文化的な営みがどのように行われるかという視点から考察される必要がある。

本発表では、遊びにおけるいざこざを文化的視点からとらえることの必要性をペープサートの遊びを例に主張したい。ペープサートの遊びは、ペープサートというモノを用いながら<かたり>合うことによって展開する遊びである。私は前回の発表で、<かたり>の「子ども文化」は保育者との身体的同調(ノリの共有)の過程で子ども達同士のノリの共有を深め、保育者からは独立的にノリを創出することであることを明らかにした。<かたり>の「子ども文化」が、子ども達が自ら身体的ノリを創出することであるとすれば、「子ども文化」としてのペープサートの遊びにおいて生じるいざこざとその解消は、ペープサートというモノを用いた身振りとかたりによって生み出される身体的ノリの視点から考えられる必要がある。本発表ではペープサートの遊びにおいていざこざが生じ、それが解消されてゆく事例を身体的ノリの視点から分析し、集合的記憶の共同想起がノリの共有を深め、それによって心理的対立が無化されることを示したい。

### II 事例

次に示すのは、5歳児のペープサートの遊びの中でいざこざが生じ、それが解消する事例である。このクラスでは、1月中旬にペープサートの遊びが、1週間の間ほぼ同じメンバー(R子・Y子・M子・K子・C子)によって毎日遊ばれた。事例1と2はそのうち

の連続した2日間の遊びの中で観察された場面である(事例1が1日目、事例2はその翌日の遊びであり一連の過程を①～⑤に分けて記したものである)。

普段から一緒に遊ぶ関係にはないY子とR子が楽しく遊びを終えた(事例1)翌日、最初は保育者を交えてペープサートを用いた<うた>や<かたり>合いが始まる(事例2①)が、すぐに子ども達のみで唱和するのだが(事例2②)、役割をめぐってR子とY子の間で心理的対立が生じ(事例2③)、R子が<かたり>合いの過程でしばしば排斥されるようになる(事例2④)。しかし、R子が遊びに参加しようとし続ける過程で、次第にR子の<かたり>にY子が応じるようになり(事例2⑤)、そのうちに両者が<かたり>を相互に紡いだり、唱和したりする姿が見られるようになる(事例2⑥)。

【事例1；Y子とR子を中心に<かたり>合いが展開する】当日配布資料

【事例2：いざこざの生起とかたり>合いの回復】当日配布資料

- ①：保育者とY子・R子を中心に<うた>とかたり>合いが始まる
- ②：子ども達のみによる<うた>
- ③：役割をめぐって心理的対立
- ④：Y子達の遊びにR子がナレーターで加わりようとするが無視される
- ⑤：Y子がR子の<かたり>に応じ始める
- ⑥：Y子とR子の間に<かたり>合いが回復する

事例1と2は子ども達が、保育者からは独立的に自ら遊びを展開しており、「子ども文化」だと言える。

事例2のようないざこざが喧嘩に発展したり、当事者の一方が遊びから抜けてしまったりすることは少なくない。R子も、それまではいざこざがあると遊びから抜けることが多かった。けれども事例2では、R子は排斥されるにもかかわらず、遊びに積極的に加わりようとし続けており、やがて決して仲がよいとは言えないR子とM子が遊びの過程で対立を解消し、<かたり>の共同性を回復している。

このようなR子のふるまいやR子とY子の共同性の

回復は、R子のパーソナリティやそれまでのふたりで、Y子が甘いお菓子（事例1に登場した）に見立てた紙の関係からは説明が困難である。事例に見られるように、紙をステージに置きながら、語り継ぐ。Y子がR子の間な共同性の回復はどのようにして可能なのだろうか。事例1で断続的に共有されたノリが増大し、連続的になっていく。同時に、Y子のR子に対する排斥的な態度は見られなくなっている。

### III 分析

#### (1) 分析の視点——身体的ノリ——

尼ヶ崎彬は、会話のコミュニケーションは発話者同士が互いに相手の身体の動きに呼応しつつ個人の動きを超えたりズムに乗りながら、このノリを共同に産出していく運動だと言っている。このことは日常の会話についてのみならず、複数の語り手によって行われる共同の＜かたり＞の場合も同様であり、語り手達は＜かたり＞のノリを共有しつつ、新たにノリを産み出してゆくのである。

「子ども文化」としての＜かたり＞の側面を持つペープサートの遊びの場合も同様に、子ども達は＜かたり＞と動きのノリを共有しつつ、新たにノリを創出するのである。

#### (2) 分析——ノリの共有のされ方——

【I：R子とY子がノリを共有し、応答的にノリを紡ぎ出す】事例1

R子とY子がペープサートを動かしながら相互に指示を出し合い、＜かたり＞合う。R子とY子の間に応答性が成立しており、ノリが共有されている。

【II：Tのノリに子ども達がノリ、子ども達のみでも再生する】事例2—①②

【III：ノリの不協和】事例2—③④

R子は、事例1と同じような調子でY子達とノリを共有しながら＜かたり＞のノリを創出しようとする。それに対してY子達はノルこともあるが、ノらないこともしばしばあり、それがR子に対する無視や拒否となっていて表れている。両者のノリは不協和なのである。

【IV：次第にY子がR子のノリを共有するようになり、共同想起の断続的成立】事例2—⑤

R子がI（事例1）に登場していたオオカミの登場を提案するのを契機として、Y子達はR子のノリにノリ始め、Y子達とR子とは断続的にノリを共有するようになる。同時に、事例1の共同想起が成立し始める。Y子達は共有していたR子のノリから逸脱することもあり、それがR子に対する排斥的態度となることもあるが、Y子達とR子のノリは次第に増大する。それに伴って最初のうちは断続的だったY子達とR子のノリの共有は、次第に連続的になる。

【V：ノリの共有と共同想起の成立】事例2—⑥

R子が事例1で用いたアリを登場させながら語ると、

以上のように、事例2で心理的対立によるいざこざが起きている状態から、いざこざが解消し＜かたり＞の共同性が回復する過程は、R子とY子のノリが不協和な状態から、ノリが共有されるようになる過程である。遊びにおける心理的対立は、身体的なノリの共有が深まることによって無化されるのである。

### IV 考察——共同性の回復はどのようにして可能となるのか——

分析から明らかになるのは、R子はY子とノリを共有しながら新たにノリを創出しようとしているのであり、不協和は、Y子がR子のノリにノらないことによって生じていること、そして、不協和が解消しノリが共有されるようになるのは、Y子がR子のノリにノルようになることによってだということである。

R子が、排斥されながらも＜かたり＞を創出し続けるのは、Y子との間にノリが共有されて事例1が再現されることを予測しているからである。IVでR子のノリがY子達に共有されるようになるのは、前日の遊び（事例1）において共有されたノリの記憶が想起されるからである。事例1では、悪者オオカミを退治する場面は皆のノリが増大しており、R子もY子もこの楽しかった場面の記憶を共有しているのである。オオカミは、ノリの集合的記憶を共同に想起させる契機的装置なのである。Vも同様で、二人のノリの共有度が増すのは、集合的記憶の想起によっている。アリとお菓子も事例1で二人のノリが増大した際の主要なモノであり、共同想起を喚起する装置なのである。

### V おわりに

以上のように、子どもの遊びにおけるいざこざは、遊びの文化的プロセスと切り離しては考えられない。いざこざに限らず遊びにおける子どもの人間関係を心理主義的に個人的パーソナリティ要因に還元して解釈することは、子どもの心理過程を子ども集団や保育の状況といった文化的文脈から切り離して抽象化してしまうことである。子どもの遊びにおける人間関係は「子ども文化」と相互媒介的であり、それゆえ、「子ども文化」の文化的視点から解釈されることが必要なのである。